

グリフィスの福井からの手紙

山下 英一

たのである。時に明治4（1871）年3月のことである。

グリフィスは情報収集の神様か鬼のような人であった。今と違って通信の手段といえは手紙であった。書いて情報を交換する以外に新しい知識は得られない。情報の記録が必要になる。それには日記やメモがあった。福井での生活は3月4日に始まり、翌年（明治5年）1月22日に終わる。その期間、日記を丹念につけた。旅ではメモをつけた。長短5通の手紙を書いて、フィラデルフィア市の家族に送る。実際にそのほとんどは家族を仕切っている長姉のマーガレットに宛てて書かれた。その他に大仕事をやってのける。通信員となって米国の新聞社や出版社へ記事を送っているのである。掲載日の分っているのも10種ある。例えば雑誌Christian Intelligencer (May 21) に「A Sabbath among the Temples」が掲載される。これをグリフィスは4月23日に書いていた。この日は日曜日 (Sabbath) で、日記には「午前中、岩淵（通訳）と散歩に出て、寺を訪ねた。」と記していた。

書くことが習い性と成った人、グリフィスがそうであった。米国内で24年、牧師を勤めたグリフィスは還暦を期して、牧師を辞任して文筆生活に入った。それには牧師と文筆の両立の不可能から、最後は天職に文筆を選んだものと思われる。余生を歴史と文学の分野で執筆に専念したい。これにはグリフィスが若くして経験した二つの機会がものを言った。①「as educator in both feudal and constitutional Japan」②「as student of the Dutch origins of our American nation」(「The Discipline of Joy」1903) すなわち ① 日本でのお雇い教師、② 米国のオランダ改革派教会の学校で学んだ学生の二つで、これは神によって与えられた機会であったと言う。つまりニューブランズウィックにある改革派教会に属する大学と神学校の学生であったグリフィスは、福井藩の要請に応じて藩校教授として福井に来

85年の生涯にグリフィスが著した書物は数

も多いが、ジャンルも広いのが特色である。学校のテキストに始まり、説教集、自国や他国の歴史書、宗教や政治に関係する人物の伝記、日本など小国の民話といった多作ぶりだ。a prolific writerと呼ばれる所以である。

しかしグリフィスが作家と認められたのは『The Mikado's Empire』（『皇国』）においてであった。この作品はグリフィスの福井から4年後に出版された。米国内の出版物における書評の多くはグリフィスの福井での体験が作品の身を幅の広いものにしたと書く。そのはずで福井に言及した箇所が作品全体に見られるからである。その頃の福井というと、江戸、横浜から遠く離れていて、西洋の影響が届かない、封建政府のなかにいて日本の古い暮らしが繰り返されていた。しかしグリフィスの日本を見る目はここから動き始めたのである。見ることは書くことにつながっていったのである。

福井からの手紙に戻ろう。昔ながらの福井といっても、変革の波は否応なしに旧来の慣習を破壊せんものと襲う。グリフィスは福井で廃藩の憂き目を目の当たりにした。そんな

山下 グリフィスの福井からの手紙

なかで54通の手紙は確実に飛脚と船舶を経て故郷の家族のもとへと運ばれていった。不運なときはそれが届くのに2ヶ月を要した。ここに月毎の手紙の(数)を記す。制度上の変革と手紙を書くことの間に関係があったと思うからである。明治4年3月(4) 4月(4) 5月(4) 6月(5) 7月(5) 8月(9) 9月(3) 10月(2) 11月(5) 12月(7) 明治5年1月(6)。これを見ると、異郷の生活に少しずつ慣れて、学校の仕事に意欲的に関わってくる3~7月。夏休みを利用して白山登山などで開放感を味わう。深まる孤独の解消にもなった8月。廃藩による学制的混乱に落ち着かない日々の9~10月。フルベッキ(グリフィスの契約に責任のある人)の提案で福井藩との契約を解消して、南校教授の任命を受けて上京するまでの11~1月。何通かまとめて出されたこれらの手紙は、両親や兄弟姉妹、親戚、恩師、友人を思いやり、心の内部を表白し、要望を伝え、生活のこまごました様子を知らせている。

手紙を手にするうちに、「グリフィス書簡のこと」(『明治村通信13-1』1982)、『The Fukui Letters 1871-1872』(私家版 1982)、『グリフィス福井書簡』訳(『北陸英学史研究』第2輯~第6輯1988-1993)を発表していた。最近になって手紙の手書きを再点検して新しく転写した。その時、「幕末における国際化と福井藩(平成14年10月26日)でグリフィスについて講演を依頼された。これは福井市・ニューブランドウィック市姉妹都市20周年記念の行事であった。いい機会なので、演題を「福井からの手紙」として、グリフィスの人格と知性がその身を置く福井という異国の自然と人情にぶつかり味わった、同調、反発、孤独、あきらめ、和解、希望の境遇のなかから福井の人々の現状や動向が浮かび出るように話したいと思った。以下は講演で読んだ原稿である。

これからお話しすることは、グリフィスが福井の町にいた頃の話です。といっても今から130年以上も昔のことですから、だれも知りようがありません。しかしグリフィスが残しておいてくれたのです。それがグリフィスのフカイ・レター、福井からの手紙であります。

では、この他には何もなかったかと申しますと、ありがたいことにフクイ・ジャーナル、つまり福井日記があり、また「The Mikatos Empire」という著書があります。この本は『皇国』という名で有名ですが、実はこの三つのものでグリフィスが福井の人に知られるようになったと思います。

そのことについて簡単に申しますと、昭和2年にグリフィスは55年ぶりに福井を訪れます。それを記念して「グリフィス博士の見たる維新時代の福井」という冊子が出ました。

これはさきほどの『皇国』にある福井の箇所を日本語に訳したもので、訳をしたのは当時の福井中学の英語教師、斉藤静でした。ついでに申しますと斉藤静は日本の英語英文学の学問の分野では忘れられてはならない人です。それから時代はさらに50年さがって、昭和51年に福井新聞に「グリフィス日記に見る維新の福井」という連載記事がその頃の写真を入れています。因みにこのときの日記の日本語訳はわたしがやりました。

そして本日、まさにこの記念すべき会場で、みなさまを前に「グリフィス、福井から

の手紙」でもって維新の福井を再現してみる機会をいただくことができました。いわば福井、いや本邦初公開ということになりました。う。という大げさに聞こえます。しかし物事にはどうも順序というものがあって、なにでも唐突には物事は運ばないもののようにです。話の都合で「福井からの手紙」のことをフクイ・レターということにいたします。

グリフィスは福井に滞在中の明治4年9月17日に28歳になります。それも明治4年3月に福井に来たと思ったら、年が明けた1月にはもう福井に別れを告げて江戸（呼び慣れていた）へ上るといって、わたしたちの時間の感覚からすれば、なんと他愛ない人を買った話でしょう。第一、越前藩と交わした契約期限は3年でした。これでは「契約違反（contract-breaker）」の烙印を押されも仕方がないとグリフィスが思ったほどでした。しかしこれはグリフィスの責任ではなくて藩の事情が大きく変わっていったからでした。

フクイ・レターを読むとそのことがかなり良く分ります。そもそももつと若いうちからグリフィスはいわゆる筆まめな人でした。福

井の家（9月までは空き家になった武家屋敷、10月から新築の西洋館）では暇を作って日記、手紙を書き、ニューヨークやフィラデルフィアの新聞に寄稿（収入も当てにする）をしています。家族宛の手紙にその他の返信を入れるとおそらくその数は想像以上でしょう。実際、フクイ・レターはその一部に過ぎないのです。それも家族のなかの長姉でグリフィスより5歳上のマーガレット（愛称をマギーといいます）に送った手紙なのです。この姉がグリフィスにとってどのような女性であったでしょうか。それは5通にも余る手紙の中身が物語ってくれるでしょう。マギーに出すのは家族に出すも同じであるとともに、手紙のなかでの最も大切な話し相手であり、安心できる聞き手でした。

それにしても福井・フィラデルフィア間の郵便が片道2ヶ月を要したということです。また手紙は書き溜めておいて飛脚のである知らせを聞いてまとめて出すという具合だったようです。これでは急な用はなさず、書くことも一方的にならざるを得ないのでした。グリフィスがクリスマスと新年のあいさつ（a

merry Christmas and a happy New Year) を11月6日の日付で送っているのもこういう訳があったのでした。家族を大事にするグリフィスにとつて、待ち焦がれる家族からの手紙の届かないほど苦しいことはありませんでした。とくに病弱で厚い信仰心をもった母親の便りは待ち遠しかったです。

越前藩は藩校教師に理化学(これは物理と化学のことですが、化学はchemistryをさします)を教える人を外国に求めていました。これには日下部太郎が長崎留学で習ったフルベッキ (Verbeck) が仲介にあたりました。フクイ・レターにはこの人の名がよく出てまいります。グリフィスの身柄はフルベッキが預かっている感があります。そして実際にそうでした。グリフィスの江戸行きもフルベッキの公式要請に従わざるを得ない面も大きかったようです。このころのフルベッキの明治政府内での力は大きかったです。この人はグリフィスのような外国人教師の斡旋に功績がありました。日本で亡くなりましたが、東京の青山霊園内の外人墓地に葬られています。忘れてはならない人物であります。

山下 グリフィスの福井からの手紙

グリフィスは月給300ドルで迎えられます。これは藩役人の最高の額より高かったようです。ちなみにグリフィスより先に来て英語を教えていた英国人ルセーは200ドルの月給もらっていました。理化実験室 (laboratory) の器具、テクストの購入はまかされていて(2700ドルになる)、さらに宿泊旅行(白山登山のよ)うな)に公費をあてるといふ具合に厚い処遇を受けています。授業については自由が利きました。ですから能力によるクラスの編成替えは臨機応変に、少人数制のフランス語とドイツ語のクラスを作っています。あるときは最初80人いた化学のクラスを40人に減らしました。怠ける生徒を除外したのです。グリフィスの頭の中はFuku Scientific Schoolすなわち福井に science を教授する学校を建てることを目指していました。

ところが藩主、藩士とその子弟の間に一大異変が起こりつつありました。それは夏休み(これはグリフィスの提案)が明けて9月に入ったころでした。江戸への流出が始まっていたのです。明治政府に請われて行く役人をはじめ3月以来700人が流出したと11月26日付

の手紙にあります。しかし優秀な学生の欠けていくほどグリフィスを失望させるものはありません。そして日本の教育制度の改革について考えるようになります。10月に入ると文部省に手紙でそれについての提言をいたしました。全国の6乃至8箇所(国立のノーマル・スクール (Normal School)、同数のポリテクニク(またはサイエンティフィック)・スクール (Polytechnic or Scientific school) の設置と優れた教師の配置を呼びかけたのです。ノーマル・スクールは師範学校、ポリテクニクのほうは技術教育の専門学校と考えたいと思います。それを日本の各地に設置すべきであるという意見の新鮮さに驚いてしまします。おそらくその一つを福井にもとグリフィスは考えていたのかもしれませんが。しかも皮肉にもグリフィスの江戸行きはポリテクニク・スクールの理化学教授に請われたことであつたのです。しかしこの江戸行きには学校係の参事である村田の猛烈な反対があり、それを言論で退けての末のことでした。このことはあとでまた触れることになりましょう。

新参者の身分でよくも文部省に提言するといふようなえらそうな事がやれたものだと思われるでしょうが、グリフィスの名声はそのころには福井のみならず、江戸にまで届いていました。8月7日付の手紙にすでに良い評判が立っていると書き送っています。また10月28日の手紙に藩や市民からグリフィスはお金のことは別にして教育愛を持った教師として尊敬されているとも書いています。静岡でも福井の教授 (the Fukui Prof.) というふうにして有名でした。手紙が日数を要したこの時代とは裏腹に人のうわさは飛ぶようにひろがります。グリフィスの日本は国の内外ともにそれほど人の動きの大きな波があったと想像されます。

10月、ラボラトリが完成して化学の実験による授業が始まりました。これはそれまでの日本の学校にはなかった画期的なことでありました。これによって後にグリフィスのことをパイオニア・エデュケイター (pioneer educator) つまり教育の開拓者とも呼ばれるようになったのです。授業の内容については始めにお話をしたグリフィス日記に記録があまり

すので、それをごらんになるとおおよそのことが分ります。教師の義務を怠るような人ではなかったのですが、この頃からグリフィスは学校以外のところで少年たちを個人的に教育する場所を作っています。また町の人たちに科学などについて分りやすく話して聞かす、いわゆる市民講座ですね、そういうことをやってみたいと思っています。これらの少年はグリフィスの新しい家に住み込みの生徒たちです。その家で日曜日の朝、いっしょに聖書を読んだのもこの青少年たちでした。外国人の日常生活を目の当たりにし、身をもって知ること、そのクリスチャン・ホームの何たるかを経験することになります。記念行事のポスターにグリフィスと生徒の写真が入っていますが、これは東京の南校の教師グリフィスとその福井出身の学生たちです。まだよく分りませんがグリフィスの作ったバイブルクラスのメンバーであるとも思われます。日本の若い人がキリスト教に心を惹かれることのもっとも盛んな時代です。それほど若い人の精神は良い意味で揺れていました。グリフィスは日本の未来をこのようにして若

い人に期待したのです。市民講座の計画のことも、どのような身分の人にも学ぶ権利のあることを知らしめようとする思いからでたものでした。ですからこれで報酬を求めめるような気持ちはありませんでした。グリフィスの来たのはただお金のためのみではありません。8月4日付の手紙に、「わたしは給料以外のお金を貰おうと思いません。福井の人は貧しいのです。」「I never expect to receive any money here except my salary... all the people are poor.」と書いています。実は同じ頃、グリフィスの家族は経済的にたいへん苦しい生活を強いられていました。その家族へ家賃をはじめ生活費や学資金の返済などで、多額のお金を送らなければならなかったのです。グリフィスの思う通りになるお金はほとんどなかったほどです。米、魚、野菜、お茶、味噌汁 (これがおいしい) といった日本人の食事に普段は甘んじています。健康にいいと思っていますが、安上がりでもあったのです。しかし服装だけは細心に気を使いました。日本の若い人のためにもきちんとした身だしなみを心がけていました。always try to be neat

and set a good example to the young Japs".

少し話題を変えましょう。藩主(the Prince)や参事(chief officers)とグリフィスの交際ほどのようなものであったか。8月12日付の手紙から読んでみます。「藩主と2人の主だった家来が食事に来ました。藩主は1時間くらい前、小姓に贈物をとどけさせました。それは上品な箱から成っていて、なかには卵5ダース、極上の日本紙1束、15ヤードほどの極上の日本モスリン、美しく薄い扇子3本、立派な漆塗の菓子箱が入っていました。藩主は私の部屋、書物、写真帖、立体鏡などを興味ぶかく眺めました。無地だが非常に立派な衣服に、高貴な白絹の下着をつけて、金の柄の小刀を差しています。挨拶に頭を下げないので、最初はひどく傲慢に見えました。が、すぐ八私たちの一人Vになって、笑顔で自由、率直に話します。外に出るとすぐ、2人の家来がひざまずき、地面に額をつけて、藩主が約10フィート歩いて行くまで待つて立ち上がり、出かけます。もちろん米国人藩主WEG(グリフィスのこと)は握手をするだけで、さよならを言い、また来るように求め

山下 グリフィスの福井からの手紙

ました。」

これは今も変わりませんが、わたしたちは人に物を贈るといふ美德を持っていますね。グリフィスはこれを「日本人は決して感謝を知らない国民ではない」「by no means an ungrateful race」と言っている。「人に丁寧である」(formal politeness)と評しています。実際、グリフィスはさまざまな人に贈物をもらいました。それらが今どうなっているのだろうとわたしなど思ってしまう。ここに面白い話があります。勝安房に頼まれて駿河藩の(今の静岡ですが)理化学の教師にグリフィスは大学の同級生で親友のクラークを推薦します。その契約の話に藩の役人がきいたときプレゼントをもらいます。しかしグリフィスはその友人が駿河に到着したと分るまではプレゼントの硯箱と駿河茶を見なかったというのです。このへんがちよっとわれわれと違うようですね。どうでしょうか。クラークの駿河行きをグリフィスはうらやましく思っています。クラークでなければグリフィスが行きたかったというほどです。駿河は徳川家のお膝元であり、横浜に近かったからで

す。当時、横浜は外国人による商会、学校、教会を持った国際都市でした。もちろん最高の条件で思う存分に働けるグリフィスにこのようなことはいえる義理ではありません。おそらくこういうことでクラークをよく知っている姉を安心させたかったのでしょう。フクイ・レターには他にもグリフィスやクラークのような外国人が出てきます。リトルウッドという英国人の英語教師は金沢藩に赴任の途中、大聖寺で天然痘にかかって死亡しています。それを知ってグリフィスは大聖寺へその墓を訪ねています。私事になりますが毎年暮にその墓参りに行くことにしております。越前藩はプリンクリーという英国人の兵学教師を招いていました。手紙によりますと、9月の15か20日に赴任の予定でしたが、取り止めになります。明治政府に雇われることになったのです。もう一人ルサーという教師のことはこの先にお話することにして、こういう日本各地、各所で仕事をした大勢の外国人教師や外国人技師や専門家のことを後に「お雇い」外国人と呼ぶようになります。さきほどお話のお雇いの例からお分りのように一人

一人が運命をもっています。しかし大切なことはそれぞれが各自の異なった文化を明治という新しい困難な時代にいわば怒涛の勢いで日本の文化にぶつけてくれたことです。今で言うインパクトを与えてくれたのです。

他方、この頃すでに選ばれた日本人留学生が欧米諸国で西洋文明の吸収に努めています。その数は驚くほどでした。グリフィスに關するこれら日本の青年について少し述べておきましょう。グリフィスが学んでいたラトガース大学と神学校のあるニューブランズウィックの町には、日下部太郎、横井小楠の二人の甥、勝安房の息子、杉浦（本名、畠山義成でグリフィスに日本語を教える。開成学校長）、岩倉具視の二人の息子、吉田清成らが留学していました。勝や岩倉はその息子からすでにグリフィスのことを聞いて知っていたのではないかと思えます。グリフィスの生地はフィラデルフィア市ですが、6歳のとき、港に近いデラウェア川河口に父に連れられて蒸気船の進水式を見に行っています。それがペリー提督の旗艦になるサスケハンナ号でした。ポスターにあります黒船のひとつがそれ

であります。その町の中にあるグリフィスの家族の家には日本人学生を下宿させています。部屋代が週8ドルの素人下宿で、父の事業の失敗から苦しい家計の足しにと考えたからですが、ここで大事なことは日本人苦学生のためを思って日本に来ることになる前からグリフィスはこんなこともしていたのです。そこには手島精一（東京高等工業学校校長）、柳本直太郎（越前藩士、名古屋市長）、杉浦が

世話になっていきます。フクイ・レターの中で、姉から手島にラテン語、ギリシャ語、理化学の勉強、とくに化学はもともと日本のためになると伝えるようなのんでいます。これは今日の日本人によるノーベル化学賞の連続受賞につながっていないでしょうか。また日本人同士で日本語を使わないよう注意してほしい、日本ではどんな小さい子供でも相手の名前をチャンとかサンづけで呼ぶほどだから下宿人の世話は大層だと頼んでいます。いわゆる金銭が目的の悪質な下宿屋も多くあったようです。病死した日下部太郎の宿はどんな所だったのでしょうか。

つぎに言葉の問題に行きます。グリフィス

にはどこへ行くにも通訳の岩淵がいつしよでした。授業はもとより役人との話合いや馬で遠出の訪問先へも通訳がお供しました。ではグリフィスは日本語についてどのように思っていたのでしょうか。もちろん話せるに越したことはありません。しかしあまりにも多忙でした。さきほどちよつとでましたが同僚のルセーは如才ないひとで日本にきて6年にもなり日本語をうまく話しました。それに比べて

グリフィスはむしろ堅物のうえに日本に來たばかりで片言もいえない。しかし通訳のほかに学生のなかにも英語の分るのがあるし、母国語で話す相手のルセーが日本語のできるということもあつて、日本語学習の必要性を感じていなかったのです。ところがルセーは契約の1年が過ぎて、更新のないままに6月末に福井を去っていったのです。かくしてグリフィスの日本語の勉強が開始されます。これをグリフィスは「必要は言葉の母あり」(necessity is the mother of speech)としゃれてみせました。いうまでもなくもとの諺は「発明の母なり」です。そして10月28日付のフクイ・レターでは姉のマギーにこう書いています。

「授業などあいかわらず忙しいのに、日本語と真剣に取り組んでいます。日本に来てから他のことで忙しすぎたのと、日本語を学ぶ必要がなくてほとんどしていません。しかしわたしの講義を日本語に翻訳してもらえなくなつて、またそのほかにも知らないと不便な目にあうので、思い切つて日本語にとり組み決心をしました。もちろん多くのことはを次々と憶えています。聞き分けられる耳と日本語で考える頭を鍛えています。だからわたしの日本語のかんりの上達を驚くにはあたりません。」ちょうどこの月にグリフィスは新築の家(900ドルかかっている)に6名の学生、生徒(本多、大岩、中野、笠原、本山、今立)を住み込ませます。これもひとつには日本語になれる利便を考えてのことであつたかもしれませぬ。

今日は10月26日です。只今はフクイ・レターの同じころの文章を読みました。グリフィスの家の足羽川をすぐ下に見るヴェランダから、川に入つて秋の野菜を洗つている女が見えます。収穫の月といつてグリフィスは米、みかん(八朔のようなものか)、柿と大根

山下 グリフィスの福井からの手紙

をあげています。ルセーがそうだったので、グリフィスも自分の野菜畑をもつていろいろな野菜の種を植えています。6月のレターから読んでみましょう。「雨季。田植えはすつかり終り、田園は新緑です。この美しい国をくまなく飾るへ青々とした緑のなかに整列する美しい田舎をなんとかしてひと目母に見せたい。わたしの庭に8ないし10種類の花の種が芽をだしました。日本の友人に分けたのもみごとに成功しました。ルセー氏に菜園の種を数袋もらいました。すでに数回にわたリレタス、ラディシユを食しました。その他はまだ見分けはつきませんが、カンタロープ、スイカ、キャベツ、カリフラワー、マメ、スカツシユ、キュウリ、リママメの光景が目には浮かびます。」外国にいてもこういう暮らしへの執着は立派だと思ひます。

ルセーはあまり外出をしたがらない。グリフィスは毎日でも町に出るのが好きです。馬で粟田部へ紙漉きを見物に行きます。途中、お供の役人が二度も落馬したがグリフィスは大丈夫だつたと自慢の報告をしています。或るときは路上で出会つた葬式の列について火

葬場に行つて火葬の様子を詳しく手紙で知らせています。たびたび寺の行事を参観します。仏教の行事が市民の毎日の暮らしに浸透しているのを見逃しません。『皇国』のなかの仏教を知らずして日本の国民性は語れないという見方は、この福井での体験から生まれたと思われます。わたしの考えでは、ルセーは物事を割り切つて考えて好きなように生きるタイプ、グリフィスは人とひろく交わつて何事も経験してから考えるタイプのように思われます。福井の生活も町の人々との間に溝を作るルセーとなるべくオープンにだれかれなく交流するグリフィスの二人の外国人を福井の人々は興味を持つて眺めていたと思ひます。藩主や役人を迎えての参観授業、新しい家の完成を祝うオープン・ハウスは近在から村人を集め、耶蘇教禁止令の高札を掲げる町でクリスマス・イヴニングのオープン・ハウスをしてその行事を公開するといったことをグリフィスはしています。訪れた人はどのよ

うに思つたか。想像できますか。九頭竜川を舟で三国まで一泊の旅、その帰りの舟のなかで、通訳の岩淵から結婚したと知らされてあ

わてるグリフィス。「日本人は結婚式に外国人 (stranger) の出るのを嫌う」と知って寂しくなる、グリフィスは日本の結婚式をぜひとも見たいと思っていました。盆踊りでにぎわう夜、人ごみのなかを足羽川の橋や川原に出て、涼みがてらにグリフィスは一杯おごつてやっています。しかも酒代は信用貸しでした。一方、ルセーは日本人の女と暮らし、蚕を飼ってシルクで一儲けを狙っている。といつてはルセーに気の毒ですが、わたしはなにもルセーに悪意を持つものではありません。しかしグリフィスの目にはルセーが「日和見主義な外国人」(time-serving foreigner) に見えました。そこへグリフィスにとって精神の危機が訪れます。

9月の手紙によります。「私が給仕に召使として雇った18歳の娘は、あらゆる点で確かにたいへん忠実で、勤勉なよい感じでした。私のどんな要求も前もって分り、私の家を家庭と変わりなく快適にしてくれました。私はこの娘がたいそう気に入っていました。そういうことの前すべてが、時々、疲れたホームシ

ックの若者に、孤独な時間の強い誘惑にならざるを得ません。2週間たつて、娘が私にあまりの慰めであり、娘自身のあまりの魅力に気がつき、11日居てもらったが、誘惑が罪にならないうちに娘を帰しました。ただ公平を期すために、2、3か月分の賃金13ドルを払うことができました。そして今、慰めが減り、いっそう淋しい家になりましたが、恥じることなく自分の内輪話をすっかり姉さんに知らせることが出来ます。「なんだか勝ち誇つて見えますが、これがグリフィス持ち前の「弱点を告白することがかえって強い気持ちになる」(feel stronger by a confession of weakness)」ということだろうと思います。これはグリフィスの信条であつたようです。秋が深まった11月も終わりのころの季節の描写をやり過ごすわけにはまいりません。わたしの日本語訳でみなさんのお耳を汚すことになりましたがお許しください。

「日本の秋は取り越し苦労と分つてほつとしました。突然の荒々しい変化がまったく無く、霜が次第に降りてくるのです。木の葉は米国と同じように変わります。低い山は真

紅、焦げ茶、常緑の光彩を身にまといま

す。天気は日が照つたり、雨が降つたり、曇つたり、薄日が差したりで四月のようです。青空、

霰、雨、日差しがしばしば同じ時間にやってくるような日は、嵐の来そうな雄大さのなか

に高い山が輝く姿を現します。城壁から白衣

をまとつた白山と別山の静かな姿の遠くに鎮

座しているのが見えます。ジュネーブの橋か

ら眺めたモンブランの山々を思い出します。

それと同じように白山は福井の川にかかる橋

からの眺めが一番いいです。」このように書いて

もらつて福井に住むものとしてうれし

いですね。どこかで話したようにグリフィス

は書くことが大好きでした。語り合うことの

好きな人でした。その生涯を通して会つた人

は無数といつても過言ではありません。わた

しの話でそのユーモラスなところもお分かり

になつたでしょう。福井では忙しいなかにも

よく読んでいます。小説はもっぱらディケンズ

の作品ばかりを読んでいます。ディケンズ

はシェイクスピアと並んで英文学を代表する

作家であります。都会に生きる貧しい人たち

の暮らしからその人間模様をあたたかく描

た作家です。

再び越前藩のことに戻りましょう。頃はやはり10月です。131年前の10月1日、江戸に発つ藩主が永遠の別れをいうためにグリフィスをその家に訪ね、30分居て帰りました。出発は翌日朝です。グリフィスの見方によれば、旧藩の、つまり封建政治がすっかり (all the Old Provincial and feudal governments) 天皇の政府 (the Imperial Government) に変わって、日本に新しい時代 (a new era for Japan) が来る。また封建制度 (feudal principalities) から天皇による中央集権政治 (Central Imperialism) に変わるといった表現が出てきます。それは「古い過去の廃墟の上に近代文明の基礎を置く」 ("lay the foundations of modern civilization on the ruins of the old past") ことであるとも書いています。このような意味の表現なら今の日本の小学生も知っています。しかしグリフィスにはそれが身近な現実であったのです。不要になった参勤交代のときの駕籠、城のお濠の埋め立てが始まり、そこに家が建ちます。制度の改新に変化はつきものであるが、グリフィスは一抔の悲しさ (sad-

ness in change) を覚えると書きました。

グリフィスにとって残念なのは、前日に藩主を最後の夕食に招いてあったのが、その日、藩主の正妻に次ぐ人が亡くなったので来てもらえなかったことでしょう。けれども4人の役人と医者、橋本はそれぞれがおみやげ持参でやってまいります。その4人とは千本、村田、奈良、長崎の面々です。藩主を飲ばせようと料理人に腕をふるってつくらせた料理の献立はこのようなものでした。1、バーミンゼリ スープ (Vermicelli soup) 2、ビフステーキ&ポテト (Beef-steak and potatoes) 3、ロースト チキン&マカロニ (Roast chicken and macaroni) 4、良い味付けの野菜 (レタスの種類) とゆで卵 (A kind of lettuce or greens, finely seasoned, boiled eggs) 5、ペストリー (料理人が作るスウィート ケーキ) (Pastry, a good kind of sweet cake my cook makes) 6、コーン スターチ カスタード & コーヒー (and corn starch custard & Coffee)。飲み物はポーター、ビール、クラレット、シャンパン (Porter, beer, claret and champagne)。これで8ドルかかったといえます。福井で最

初の洋食ではないでしょうか。これがグリフィスゆかりの風琴亭さんの西洋料理へと受け継がれたのでは。聞いてみないと分りませんが面白いことです。

そろそろ終りにしましょう。フクイ・レターを読んで2つのキーワードのあることに気がつきました。それはfutureとlonelinessであります。わたしはものごとを数字で処理するのを苦手とする、むしろ嫌いなほうですが、がまんして申しますと、future (未来としておきましょう) が7回、loneliness (孤独としておきます) がlonelyな現状も入れて8回、出てきます。独身の男が言葉も分らず、異教の国の、それも仏教の信徒の多い福井にやってくればそれだけでもlonelinessにならざるを得ないでしょう。それは頭ではわかからなくはありません。しかしfutureとなるとどう考えたらよいでしょう。グリフィスのメンタリテイつまり精神状態においてこの二つは別々のものでなく、密接につながっているのです。lonelinessつまり「孤独」が3月から6月に及んで7月に入ると同時にfutureつまり未来が始めて出てきます。たとえば教会、ク

リスチャンの友人、気のあった心の友 (congenial spiritual soul) のないことの孤独のなかにあって、グリフィスは先のこと (future) は神の手にゆだねるしかないことに思いが至ります。もちろんグリフィスは全身全霊で与えられた仕事に邁進することで孤独を忘れると考えます。事実そうでした。その後は "the new future" とか "Japan of the future"、*ゆびに "the future of Japan"* というように仕事をとおして将来の日本について何か責任を持ち始めます。つまり孤独という弓の糸を引くことで未来という矢を放つのでした。そして明治5年1月22日が来ます。出て行くグリフィスと出て行かせまいとして、グリフィスのいう片や「岩」で、片や「白山」の頑固者の対決も岩淵の巧みな通訳がその場の笑いを誘って、談笑のうちに幕となり、2、3フィートの深い雪の早朝、胸を張って (*I go away in honor*) 江戸に立去るといふのであります。講師ならここで扇を鳴らすところでしょう。わたしはその岩淵の機転をきかせたことばがどのような表現であったか、いまもって分らずじまいなのを残念におもいます。フクイ・

レターの最後は、グリフィスが「つらい孤独」 (*bitter loneliness*) を振り返りつつ、神の手を借りて、「隠された未来」に通じる未知の距離を剥がしていく (*"unveil the unknown length or brevity of the hidden future"*)、自分を見つめるところでおわっています。終わりのことばをこう結んでいます。

"What shall the future be?"

「未来はどうなるだろう？」

わたしの話を聞いてくださったみなさんはこのことばをどのように受け止めますか。130年も昔の苦しい孤独な生活条件のなかで書かれたグリフィスの故郷に送った手紙は、反古になるどころか人間の未来への遺言であったと、これは決して誇張でなくわたしには思われます。フクイ・レターでグリフィスが残してくれたもう一つの言葉を今日のために捧げてわたしの話をおわります。

"Verily the Well of Blessing has poured its waters even to the Phil-home."

「まことに幸福の井戸 (福井) はその水がファイラデルフィアの家にも注いでいる。」

わたしはこのメッセージのあとにニューブラズウィックをつけてこのように読んでみます。

"Verily the Well of Blessing has poured its waters even to the Phil-home and N.B."

ご清聴ありがとうございました。